The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	三十三間堂
Author(s)	源, 豊宗
Citation	懐徳. 1939, 17, p. 31-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89023
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

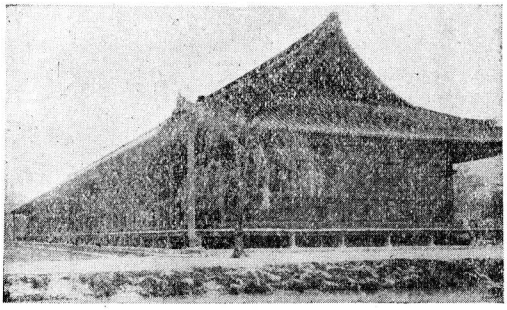
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

三十三間堂

源　豐　宗

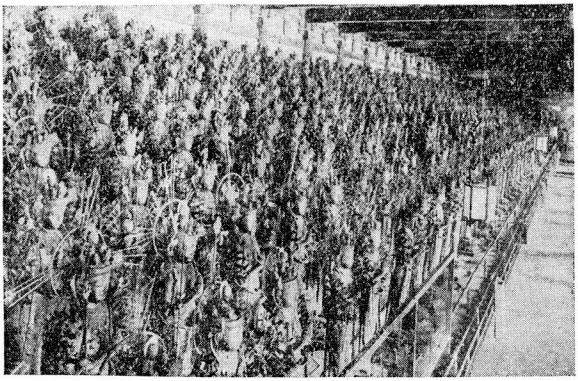
三十三間堂といふ名は、いかにもよくあの御堂の性格を言ひ表はしてゐる。三十三間堂といふ此の長々しい、然し素樸な音調は、向ふのはては霞むかと見えるまで、あの單層の屋根が眞一文字に遠く伸びてゐる此の堂宇の印象と、まことに相通ずるものをもつてゐる。三十三といふ數字は、誰にでもすぐ三十三所の札所や、又法華經に說かれた觀音の三十三身を想はしめ、それが觀音と深いゆかりのある事に氣づかしめるが、一千一體といふ數多い千手觀音を祀つた此の堂の名としても、その計數性のひびきをもつた三十三間堂といふ名は亦實にふさはしい名である。



三十三間堂本堂

然し三十三間堂は、正しくは蓮華王院といふのである。美くしい名である。蓮華王院は、後白河法皇の御願によつて、長寛二年の冬十二月に建立された。此の地は後白河法皇の御所の在つた法住寺の北西部の一廓に當り、こゝより南東に

伸びて、その前後には、多くの堂塔や御殿が建立されたのであつた。平家物語にも「此御所ハ應保元年四月十三日御移徙有テ、後山水木立カタカタノ御シツラヒニ至迄思ヤウニサセマシツ、新日吉、新熊野其近邊ニ祝ヒ奉ラセ給」と記され、法皇が此の法住寺を中心として、新な文化的なる御還境を現出せんとせさせ給ふた事が知られる。殊に、蓮華王院建立の後九年、承安三年法皇の后、建春門院の御願としてそこに造營された最勝光院の如きは、土木之壯麗、莊嚴之華美、天下第一と稱せられ（明月記、嘉祿二年六月四日條）、その御所の障子には、法皇の熊野と日吉の御幸及び門院の平野行啓等を光長に畫かしめ、特に人物の相貌は似繪の名手であつた藤原隆信に描かしめた（玉葉承安三年九月九日條）美術史上最も注目すべき繪圖が施こされてゐたのである。蓮華王院には、更に治承元年、五重塔をその東北に建立されなどしたが、殊に、こゝに建てられた寶藏は、當時宇治平等院の寶藏と共に、天下の二大寶庫として御相傳の種々の寶物を納められ、恰かも、今日の正倉院を思はしめるものがあつた。法皇は殊の外繪畫に御趣味を有し給ひ、多くの繪卷などを作らしめ給ふて、我國の繪卷は、實に此の後白河法皇の頃



三十三間堂内佛像

に發達したと云つてもいゝのであるが、その當時作製されたそれ等の多くの繪卷は、實に此の寶藏に納められてゐたのであつた。然し、創建より八十六年を經て寶治三年二月廿三日、姉小路室町より起つた火は西北の風に煽られて大火となり、更に火は飛んで蓮華王院の塔に遷り、忽ち此の三十三間堂の堂舍並千體觀音は灰燼と成つて了つた。唯中尊は御首と左手とを取出し、又千體の中百五十六體並廿八部衆は之れを取出す事が出來た。かくして間もなく再建が計畫され、十七年の後文永三年四月漸く落成したのである。今日の三十三間堂は卽ち此の時の建築である。而して寶藏は幸にして此の時は災を免れたが、しかし遂に足利時代に至つて失はれて了つた。

蓮華王院は中央に丈六坐像の千手觀音を安置し、左右各五百體の等身の千手觀音を十段に配列してゐる。凡て一千一體の觀音が祀られてゐるのである。中央の丈六の四方には四天王を配し、後方の廊下には、廿八部衆風神雷神など並んでゐる。然し此の後方の廊下にならんでゐる像は恐らく當初は正面の外陣に配置されてゐた事であらう。

然し、千體の觀音を造立し、之れを安置する堂宇を建立する事は、蓮華王院に始まるのではない、すでに長承元年三月鳥羽上皇の御願によつて、白河法勝寺の傍に造營せられた得長壽院がそれである。中右記によると中央に丈六正觀音像、其の左右に等身正觀音立像各五百體を安置し、像中には千體の

小佛を奉納した。此の得長壽院が如何なる規模を有してゐたかは知られないが、約三十年の後造營された蓮華王院は、恐らくそれの模倣であつたと考へられるから、得長壽院の壯觀もほゞ想像出來よう。藤原時代には造佛造寺の功德が强く信仰された結果、盛に佛像が造られ、寺塔が建てられた。そこには一面藤原時代の藝術主義の精神と相通ずるものがある。然し此の信仰の昂ずる所、唯物的計量的觀念は、數の大きさを尊ぶ樣になつて來る。堀河天皇の長治二年には主上の御不豫により等身の觀音百體が造立され、大治二年三月には法勝寺內に新堂を造つて丈六愛染明王三體、等身像百體、丈六大威德明王一體等身同像百體が造立されてゐるのもかゝる傾向の反映と見られる。そこには世紀末的なエンスージヱイズムも感じられる。然し、そこに精神的には藤原末期的なものゝ發現を見るのであるが、同時に鎌倉的なものゝ反動の出現すべき豫感を吾々は覺えるのである。

蓮華王院は三十三間堂と云はれてゐるが、それは內陣の柱間の數で、實は左右の外陣各一間を合して桁行三十五間、その尺度の上に計られた實際の長さは六十五間二尺三寸に及ぶのである。側面は五間、その中前後の各一間が外陣である。正面に七間の向拜が突出してゐるが、背面に於いては實に氣持のよい單純さを以つて單層の軒の線が一直線に走つてゐる。恐らくこれ程長さの强調された建築は、得長壽院のそれと共に、當時にあつても類稀なるものであつたと思はれる。藤原時代には九體阿彌陀

堂が屢々造營され、從來に見ない長さを持つた建築が行はれた。現にその一つとして淨瑠璃寺の九體堂が殘つてゐる。然し此の堂と雖も桁行十一間に過ぎず、吾々の視覺的印象としては、長さよりもむしろ落着いた平らさが感じられる。恐らく文永再建の現在の三十三間堂の建築は、細部的手法は別として、その大體の構造は長寛創建の規模に隨つたものと解釋される。吾々は此の堂を單純な單層入母屋造となし、單純な直線的プランを以つて構築したそのモチーフに敬意を拂ふものである。此の單純は決して貧しき單純ではない。雄大なる單純である。長さとは一種の運動であるが、此の三十三間堂を見る吾々は、當然此の建築の長さを眼を以つて辿るのである。辿るといふよりも走るのである。そこに此の建築に於ける一種の俊敏性を求める事が出來る。しかもあの六十五間の長大なる屋根の覆壓する感覺は、まさしく人の力感をそゝり、內面的緊張を誘ふに充分である。吾々はそこに鎌倉的性格と相通ずる一種の逞ましさを感じるのである。殊に東北に接して五重塔が建立され、垂直的な竪の線の對立によつて水平的な長さの孤立を救ふと共に、その長さを引立たせる事によつて此の建築のモチーフを一層明瞭にしたのは注意すべきであらう。

內部もその簡素な構造は、男性的な美しさを持つてゐる。中尊の安置された中央三間のみが折上組入天井となつてゐる外は、化粧屋根裏の白亞の地に、梠の黑い直線が美くしい橫縞の模樣を描いてゐ

る。又內陣に架け渡された三十幾本の長大な虹梁は、その上に板蟇股を以つて上層の虹梁を受け、一つの雄大な構成的景觀を見せてゐる。もとはそれ等構架材の各に彩色の文樣が描かれて居つたのであるが、今は殆んど剝落して、一層簡素になつてゐる。此の建築は勿論當初は和樣によつてゐたのであるが、建長再建の際、部分的には唐樣が行はれ、肘木下端のがつちりした輪廓や、外陣の柱より內陣柱をつきぬけてゐる貫の木鼻の繰形には、明らかに唐樣の特徵が見出される。

然し此の三十三間堂の中に入つたものは、何人と雖も、そこに見渡す限り整然と十階のスタンドに幽かなる光を受けて並んだ觀音の蕭然たる景觀に心をうたれるであらう。こゝには全く現實とはかけ離れた別世界の空氣が漂つてゐるのである。默然と林の如く立ち並んだ限りなき佛の群は、單なる作られた木像群とは思へない。何かしら一種の生氣がたゞよつてゐるのを感じさせられる。私は、幼い頃、三十三間堂に參れば澤山の佛の中に必ず亡くなつた人と似た顏に逢へると聞かされて、丁度五歲の時父を喪つた私は、そこへ參れば父に逢へさうに思つて、遠い京都の三十三間堂を心ひそかにゆかしく思つた事を覺えてゐる。恐らく信仰の濃やかな人の心には、此の三十三間堂の幽玄な空氣の中に身をおいては、さういつた幻覺を經驗する事もまことに有り得る事である。これはたしかに千といふ、視覺的には無限にも近い數量の持つ不思議な力でもある。吾々は屢々薄明の神祕的な光の中に佛を見

る機會を持つ。そして勿論敬虔な感情をそこに體驗する。然し此の廣漠たる壇上の限りなき佛のならんだ三十三間堂に於いて經驗する感情は全く別である。もつと切實な神祕感である。

此の三十三間堂の佛像製作に就いては、詳かな記錄を持たない。壬生寺の文書によると南都佛師康朝が此の造佛の功によつて法眼に敍せられた事が知られる。康朝は定朝より四代の康助の嫡子で、當時興福寺佛所の棟梁としてその一門を率ひ來つて、此の蓮華王院の造佛に携つたのであらう。大佛師系圖によると康朝の弟康慶の條に、

蓮華王院左右千體中此作多、京中四流佛所寄合作之

と記されてゐるが、治承元年康慶は蓮華王院の五重塔の佛像を作つて法橋になつた（玉葉治承元年十二月十七日條）事を見れば、康慶が兄康朝と共に千體觀音の製作に協力した事は認められても、彼が大佛師として活動したとは勿論考へられない。尤も康朝が三十三間堂造佛の際大佛師をつとめたか否かも、必ずしも明瞭だとは云へない。當時京都には累代の宮廷佛師としての傳統を持つた圓派の明圓や、院派の院朝、院尊等があつた。然し康助以來京都に進出し、宮廷の御用も勤めてゐる南都佛師としての彼の一派が、特に挺んでられて命を奉じた事も極めて有り得る。後、治承元年塔の造佛が康慶に委ねられた事からも、さう考へられる。然しよく康朝がその時大佛師を勤めたとしても、大系圖が暗示す

る樣に京都の佛師が同時に動員されて、仕事を分擔した事は察するに難くない。

寶治三年燒失の後、その再建の時造佛に携つたのは湛慶の一門であつた。中尊の臺座の軸に記された建長六年の銘によると、八十二歳の頽齡を以つて湛慶は四十八歳になつた甥の康圓と共に此の造佛に活躍した事が知られる。湛慶は丈六中尊を作つたと共に等身立像をも作り、彼の名を刻んだ觀音像數軀が、先年修理の際に見出されてゐる。康圓の銘を有するのも發見された。其の外勢圓、隆圓といふ未知の作家の名も見えてゐる。

千手觀音像　湛慶作在銘

ともすれば殆んど一樣に見える千體の千手觀音も、仔細に見て行けばその間にそれぞれ表現の異りの存するのがわかつて來る。同じ十一面千手の等身立像であるが、着衣の表現にも、褶襞の形や、裾の取扱に、自から變化があり、相好に於いても、同じく滿月慈悲の相とは云ひ乍ら、視覺のみが區別し得る微妙な相違を以つて並んでゐる。そこにいのちを持つ藝術の尊とさがある。

これ等の佛像相互の變化は、云はゞ作家に於ける藝術精神のニュアンスの相違を示すのであるが、同時にその中には明かに時代の樣式的相違を示すものを見出す事も出事る。一代要記によつて知られる樣に寶治累燒の際、草創時代造立の百五十六體の觀音像が取出されたのであるから、千體の中には約十五パーセントの舊像を有する筈である。見て行くと、吾々はその像身に於いては、比較的輕らかさ、なよやかさを、相好に於いてはおだやかさ、みやびやかさを持つた像に折々遭遇する。これがまさしく舊像なのである。それに對して、建長の新像は、全體としてガッシリした表現である。相好も、同じ樣に圓かであるが、新像には力をもつた頰のふくらみや、するどい視線を投げる眼に、一種の逞しさを示してゐる。それを野性的健康の美と云つてもいゝかも知れない。そこには運慶の作風を傳へた湛慶の樣式が、全體を司配してゐるのを覺える。

千手觀音像（草創時代）

舊像の中には「運慶」と墨書されたものが二軀存してゐる。然し此の「運慶」といふ銘は、その書風より見ても、運慶時代とする事は困難であるが、殊に、蓮華王院の創建された長寛二年は、運慶は

未だ少年期を脱してゐなかつたと考へられ、果して彼が此の造像に參加したか否かすらも年代的にあやぶまれるのであるから、たとへ彼が參加しても、恰かもすぐれた人並の作家の如く、しかも他の作家は全くその銘を記さないのに、獨り彼のみが作者銘を記入したといふ事は到底是認し難い。恐らく江戸時代に修理をした際に、運慶がそれ等の千體佛を造つたといふ傳説に乘じて、何人かゞ書き込んださかしら事であらう。

中尊の丈六觀音の坐像は、一代要記によつて、舊像の御首と左手とが火災に取出されたといふのであるから、それが今の像に用ひられてゐるか否かは問題となり得る。然し現在の中尊の相好に於ける表現は、之れを湛慶の作と見るには、彼の他の作品に比較して、湛慶的なものを殆んど見出し難い。そしてその一種の優雅さ、殊に頰より唇にかけて感じらるゝなごやかな情緒は、むしろ藤原的なものと相通ずるのである。長寛といへば既に鎌倉的なものゝ發生しつゝあつた時であり、これより數年前、永曆元年に造立された東大寺の四天王の如きは、まさしく鎌倉的精神の充實せるものである。隨つて此の中尊に見られるどこか鎌倉的な硬さは、長寛の作品として必ずしも矛盾しないのである。私はその首はむしろ草創期のものとすべきであると考へる。唯左手といふのは、その多數の手の何れか明かでないか、もし千手の中の幾本かとすれば、或は現在それが交つてゐるかも知れない。

然し三十三間堂の佛像として注意すべきは、何を措いてもかの廿八部衆である。その中八體ばかりは京都博物館に陳列されてゐるが、それ等は實に日本の彫刻史上に大きな光彩を添えてゐるのである。寺傳には運慶の作といひ、又學者の間には建長の新造と見るものもある。然し一代要記によつて寶治の火災に廿八部衆が救はれてゐる事が明かなばかりでなく、その作風より見ても到底鎌倉中期にまで下るものではない。隨つてこれ等の像を、一往、草創當時のものとなすのは、むしろ穩當な處理法ではある。然しこれ等の像が千體觀音と同時の作か否か、そこに問題がある。

廿八部衆は、然し、少くともはや藤原樣式の範疇に屬するものではない。その何れの像に於いてもその姿態には力のある運動が現はれ、表現には寫實的な觀照が示されてゐる。殊に各の相貌に於ける庶民的氣品は、まさしく鎌倉的なるにほひをたゞよはしてゐる。それであるから、その鎌倉的なものに固執して此の像を見れば、建長の新作と見られるのも必ずしも理由のない事ではない。然し此等の像と比較するに適當なものを求めると、文治四年に康慶一門によつて造立された興福寺南圓堂の四天王、建仁二年定慶の作つた興福寺の梵天、帝釋等がある。廿八部衆の畢婆迦羅王や毘樓勒叉等は前者に、同じ主題の梵天帝釋天は云ふまでもなく後者と對照するによい。文治四年は長寛二年より廿四年、建仁二年は三十八年の後であるが、廿八部衆は康慶や定慶の作風に對して見ると、全體として纖細であり、どこかに一種の優雅さが感じられ、明かにそれ等よりも先行するものである事は肯定され

る。而してそれ等の像の着衣にはなほ藤原的な龜甲、七寶つなぎ等の文樣や、藤原的典雅な色調を以つて裝飾されてゐる。かうして見ると、矢張り、少くとも草創期を甚しく下るものでない事が云へるのである。さうだとすれば、此の廿八部衆は或は康朝一門の手に成つたと見るべき可能性をも許される。康朝はその蓮華王院の造佛以後の消息は不明であるが、その嫡子成朝は文治二年鎌倉にあつて將軍家の造佛に從つてゐる。成朝もそれ以後消息を絶つて了つたが、此の一門の世に重く用ひられた點よりして、其の藝術も推賞に値したものであつた事が想像される。そして果して此の廿八部衆が此の一門の作風を示すものと云ひ得るならば、吾々は此の世には忘れられた康朝一門の藝術に對し、相當の敬意を拂ふべきであらう。廿八部衆の何れも、皆すぐれてゐる。摩醯首羅の男性的筋骨の描寫や、横笛を吹いた迦樓羅王の相貌や、殊に右足の爪先を浮かして、演奏者自身がリズムに身を托してゐる姿態のこまかな心遣ひにも、作者の非凡な藝術的感覺が示されてゐるが、殊に婆藪仙の老ひさらばうた風姿の眞に迫つた表現の如き、明かに日本に於ける彫刻の最も偉大なる作に數へらるべきもの

二十八部衆ノ内
摩醯首羅王

である。

恐らく、宗達が畫いた建仁寺の風神雷神の一雙の屏風に、その機智的なモチーフを供給したと思はれる風神雷神の像は、三十三間堂を訪ふた何人の印象にも最も深く殘るものである。あの動勢のはげしい表現は、繪ならば信貴山緣起繪卷に見える空飛ぶ劍の護法にでも比せられよう。信貴山緣起も、

二十八部衆ノ内
婆籔仙

矢張り平家時代前後の產物である。兩者の類似は決して遇然ではない。二つに現はれた精神は一つなのである。生き生きしたもの、潑剌たるものに、美を求める新しい時代精神だつたのである。そこにすでに明け離れ行く鎌倉時代を、誰人も認めるであらう。

三十三間堂に結びついた樣々な物語りは、もはや私の持場ではない。柳の棟木の話しや、宮本武藏の仇討のはなしなどは、私も聞き手に廻つて、その面白さにふけり度い所である。貞享四年、三十三間堂の西裏の椽で、紀州の藩士生年十九の和佐大八が、南の端より北の端へ六十五間の長距離を、一

晝夜に一萬五千五十三本の矢を射て、その中、通矢八千百三十三筋を數へ、慶長以來の最高記錄を樹立したといふ話などは、尙武的競技の流行してゐる今の時世には殊に興味のある話題であらう。

（昭和十四年九月十日稿）